

令和 6 年 5 月 4 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00141

研究課題名（和文）リディアン・クロマティック・コンセプトと武満徹についての研究

研究課題名（英文）The Lydian Chromatic Concept and Toru Takemitsu

研究代表者

宮川 渉（Miyakawa, Wataru）

明治大学・情報コミュニケーション学部・特任准教授

研究者番号：10760051

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、作曲家武満徹がリディアン・クロマティック・コンセプト（以下LCC）という主にジャズで用いられる理論をいかに応用しているのか、明らかにすることを目的とした。しかし、コロナ禍の影響で研究の方向性を大幅に見直す必要が生じ、その結果、武満作品研究に関しては、《地平線のドーリア》の分析に取り組み、そこで武満がLCCを雅楽などと関連づけて独自の形で応用していることを明らかにした。またこの研究以外に新たに細川俊夫作品研究を開始し、彼の音高システムの主要な点を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

武満徹と細川俊夫は日本の現代音楽を代表する重要な作曲家とみなされており、国内外を問わず、研究が進められてきた。そこで本研究は、彼らの作曲技法において、これまで明らかになっていなかった点を解明することに努めた結果、一定の成果が得られたと考えている。またリディアン・クロマティック・コンセプトというジャズの理論を武満徹という現代音楽の日本人作曲家がいかに応用したかという問いは、横断的かつインターカルチュラルな研究課題で、今日取り組む価値があるものと思われる。そのため本研究の成果は明確な学術的意義があると判断している。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine how Toru Takemitsu used the Lydian Chromatic Concept (LCC), a jazz theory, in his work. However, owing to the COVID-19 pandemic, the direction of this research had to be drastically revised. As a result, I analyzed “The Dorian Horizon.” In this analysis, I clarified that Takemitsu had applied the LCC in relation to gagaku in his own way. In addition, I began researching the works of Toshio Hosokawa, and the study clarified the central aspect of his pitch organization.

研究分野：美学および芸術論関連 / 芸術一般

キーワード：武満徹 リディアン・クロマティック・コンセプト 細川俊夫 音楽理論と実践 作曲技法 現代音楽
ジャズ 雅楽

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

武満徹は今日、音楽史上において重要な作曲家と位置付けられているが、彼の作曲技法に関しては未だに不明な点が多い。なかでも武満自身が大きな影響を受けたと述べているリディアン・クロマティック・コンセプト（以下 LCC）という主にジャズで用いられる理論が彼の作品においていかに取り入れられたかについての研究はほとんど進んでいないのが、研究開始当初の状況であった。

また武満徹の LCC への関心は単なる一作曲家の好奇心として捉えられることが一般的であったと思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、LCC が本来ジャズでどのような形で使用された理論であるかを解明し、そこから武満の LCC の自作への取り入れ方の特徴を明らかにすることである。また武満の LCC への関心が、マイルス・デイヴィスやジョン・コルトレーンなどの同時代のジャズ・ミュージシャンたちが西洋音楽からの脱却を試み新たな音楽表現を模索した時に LCC から大きな影響を受けたことと深い関わりがあるのではないかという疑問が生じ、この点も明らかにすることを本研究の目的とした。

尚、この LCC に関する研究を通じて、この理論がジャズ以外のジャンルにおいても有効な理論になりうるかを解明することも期待した。

3. 研究の方法

(1) LCC の特徴の明確化

LCC がどのような背景で生まれ、どのような重要性をもつものであったかという歴史的背景、ジャズなどでいかに使用されてきたかという理論的側面、実践的側面などを調査する。具体的には、LCC、この理論を考案したジョージ・ラッセル、これから影響を受けたと言われているモード・ジャズに関連する資料調査を行うと同時に LCC の関係者に対する調査も進める。

(2) 武満作品における LCC の役割の明確化

(1)の研究結果を踏まえた上で武満作品の分析を行う。特に武満が LCC を応用した作品として知られている《地平線のドーリア》などを分析対象作品とする。

4. 研究成果

本研究は、新型コロナウイルス感染症流行により、予定していた国外での調査や国内の音楽大学の図書館などでの調査を行うことが困難になり、研究の方向性を大幅に見直す必要が生じた。その結果、LCC と武満作品の研究に関しては、自身で進めることが可能な研究に取り組みことにし、それ以外に新たに細川俊夫作品研究を開始した。

LCC と武満作品の研究に関しては、可能な限りの資料収集・調査を行い、LCC の関係者にも取材を行った。具体的には『調性組織におけるリディアン・クロマティック・コンセプト The Lydian Chromatic Concept of Tonal Organization』の翻訳を担当した一人であり、ジョージ・ラッセルに師事した布施明仁や同様にラッセルのもとで学び、LCC の講座を開講している藤原大輔にオンラインなどで取材を行い、多くの貴重な情報が得られた。また2021年4月から11月までの期間に15回にわたって藤原大輔がオンラインで行ったLCCの講座を受講したことにより、この理論への理解を深めることができた。

これらの資料、取材、講座などを通じて得た知識などをもとに《地平線のドーリア》の分析に取り組み、その成果をまとめた論文を2022年度に『音楽表現学』に投稿し、出版された。この論文を通じて、モード・ジャズの音楽家たちが旋法的な手法を用いて水平的な演奏方法を模索したことに共通する特徴が《地平線のドーリア》には見られること、また武満がLCCを雅楽などと関連づけて独自の形で応用していることなどを明らかにした。

細川作品研究に取り組むきっかけとしては、ソルボンヌ大学音楽学研究所IREMUSの研究者 Liao Lin-Ni から細川の笙のための作品に関する研究発表を依頼され、フランス国立音響音楽研

研究所（IRCAM）でオンラインを通じて発表を行ったことが大きい。この講演を準備する上で、細川に取材を行い、この取材の内容はカナダの学術誌に掲載された。これらの講演や取材などを通じて、コロナ禍においても細川作品研究が国内で行え、比較的に進めやすいことが分かり、またこの研究自体まだあまり進んでいないこと、細川は武満に大きな影響を受けた作曲家であるため、細川作品研究は本研究を進める上でも役に立つと考えられること、など様々な点から細川作品研究に取り組む意義があると考えられ、同時に取り組むことに決めた。

その結果、細川作品研究においても成果が得られたと考えている。特に細川作品の音高システムはこれまで明らかになっていなかった点が多かったが、オクタトニック・スケールが1990年代後半以降に彼にとっての「調性のようなもの」であることを1990年代の作品を分析することによって明らかにした。この研究結果は学術誌に投稿し、受理された（2024年10月に出版予定）。また2023年5月に武満と細川の作品研究に関する発表をフランス国立音響音楽研究所で行い、さらに同年6月にLangages artistiques Asie-Occident（Langarts）がパリのInstitut national d'histoire de l'artで開催した学会に参加して、細川のリズムの考え方に関する発表を行った。この発表をもとに執筆した論文はLangartsの編集委員会によって査読され、その結果、出版社L'Harmattanから2024年6月に出版される予定である。尚、本研究の対象となる細川には2023年12月末にインタビューを行うことができ、多くの新たな情報を得ることができた。この情報をもとに進めた分析をまとめ、学会発表と論文執筆に取り組むことを予定している。

またLCC、武満作品、細川作品には直接関係はないが、これらの研究に取り組む以前から進めていたカイヤ・サーリアホ作品などのスペクトル音楽に関する研究を2019年度にも取り組んだ。このことにより20世紀後半の音楽家や作曲家たちに共通する考えや関心事を俯瞰して捉えることが可能になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 宮川 渉	4. 巻 20
2. 論文標題 武満徹《地平線のドーリア》とリディアン・クロマティック・コンセプト	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音楽表現学	6. 最初と最後の頁 55-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34353/jmes.20.0_55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Wataru Miyakawa	4. 巻 32(1)
2. 論文標題 Entretien avec Toshio Hosokawa	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Circuit - musiques contemporaines	6. 最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7202/1088787ar	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮川 渉	4. 巻 66
2. 論文標題 カイヤ・サーリアホ《光の弧》におけるデッサンの役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20591/ongakugaku.66.1_51	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮川 渉	4. 巻 65(2)
2. 論文標題 カイヤ・サーリアホ《光の弧》におけるスペクトル音楽の影響 コンピュータ・プログラムのデータとスケッチの分析を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 90-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20591/ongakugaku.65.2_90	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮川 渉	4. 巻 70
2. 論文標題 細川俊夫作品における「母胎和音」と関連するオクタトニック・スケールの使用-1990年代の大編成作品の分析を中心に-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 宮川 渉
2. 発表標題 細川俊夫作品における旋律の漸進的展開の手法
3. 学会等名 日本音楽学会第73回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Wataru Miyakawa
2. 発表標題 L'orgue a bouche sho dans l'oeuvre musicale de Toshio Hosokawa
3. 学会等名 Sheng! L'orgue a bouche - 11th seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮川 渉
2. 発表標題 細川俊夫と雅楽
3. 学会等名 日本音楽表現学会第19回 (天翔るペガサス) 大会分科会誌上発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮川 渉
2. 発表標題 武満徹《地平線のドーリア》における様々な音楽要素の共存のあり方 形式や音組織の分析を中心に
3. 学会等名 日本音楽表現学会第18回（ペガサス）大会分科会誌上発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮川 渉
2. 発表標題 リディアン・クロマティック・コンセプトと武満徹についての研究
3. 学会等名 東洋音楽学会第71回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Wataru Miyakawa
2. 発表標題 Le processus compositionnel de Lichtbogen de Kaija Saariaho
3. 学会等名 Spectralisms 2019 International Conference 2nd edition (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮川 渉
2. 発表標題 K. サーリアホ《光の弧》におけるデッサンの役割 スケッチの分析を中心に
3. 学会等名 日本音楽学会第70回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Wataru Miyakawa
2. 発表標題 Les langages musicaux inspires du sho chez Toru Takemitsu et Toshio Hosokawa
3. 学会等名 Institut de recherche en Musicologie主催Sheng! L'orgue a bouche - 18th seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Wataru Miyakawa
2. 発表標題 La conception rythmique de Toshio Hosokawa
3. 学会等名 Langages artistiques Asie-Occident (Langarts) 主催La perception du rythme selon les arts et les cultures - Manifestations artistiques et fondements culturels (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Wataru Miyakawa
2. 発表標題 Le travail en collaboration entre Mayumi Miyata et Toshio Hosokawa
3. 学会等名 Institut de recherche en Musicologie主催Sheng! L'orgue a bouche - 21st seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Wataru Miyakawa
2. 発表標題 The concept of mother chord in the works of Toshio Hosokawa
3. 学会等名 ICTMD Musics of East Asia symposium (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Wataru Miyakawa	4. 発行年 2024年
2. 出版社 L' Harmattan	5. 総ページ数 -
3. 書名 La perception du rythme selon les arts et les cultures - Fondements culturels et demarches artistiques	

1. 著者名 Wataru Miyakawa	4. 発行年 2025年
2. 出版社 Hermann	5. 総ページ数 -
3. 書名 Musiques au Japon	

〔産業財産権〕

〔その他〕

作曲初演、宮川渉、「En spirale」、ヴィオラ、杉並公会堂小ホール

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------